

建築設計学第3

ゲストレクチャー番外編

7月13日

オブジェクトと建築

オブジェクト指向存在論について

飯盛 元章

## 飯盛 元章

- 中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学
- 昨年度末に博士論文を提出し、学位授与まち
- 専門は、A・N・ホワイトヘッド、G・ハーマンの形而上学
- 博士論文では、あらゆる存在者が関係しあい連続的にむすびついたホワイトヘッドの世界観を、ハーマンなどの理論をもちいて批判的に考察。ホワイトヘッドの体系のうちに、関係が途切れる非連続的な要素を見出す、ということを行いました。
- ハーマンの論文などを翻訳
- 学部は、早稲田大学第二文学部表現・芸術系専修

# 発表内容

- 21世紀に入り現代哲学では、実在論（人間の思考とは無関係にものが存在すると考える立場）が再評価されています。
- その中心をなすのが、思弁的実在論やオブジェクト指向存在論と呼ばれる立場です。
- これらの実在論的な潮流は、哲学の領域を超えて、建築やアート分野にも影響をあたえています。
- 今日は、こうした潮流の中心的な牽引役を担っているグレアム・ハーマンの哲学について紹介したいと思います。

# 発表構成

## Part I 知を挫折させる岩としての実在

導入部。ハーマンが描く世界のあり方について簡単に紹介。

## Part II グレアム・ハーマンとは

ハーマンの経歴・著作などについて紹介。

## Part III オブジェクト指向存在論について

ハーマン自身の形而上学体系であるオブジェクト指向存在論について考察。

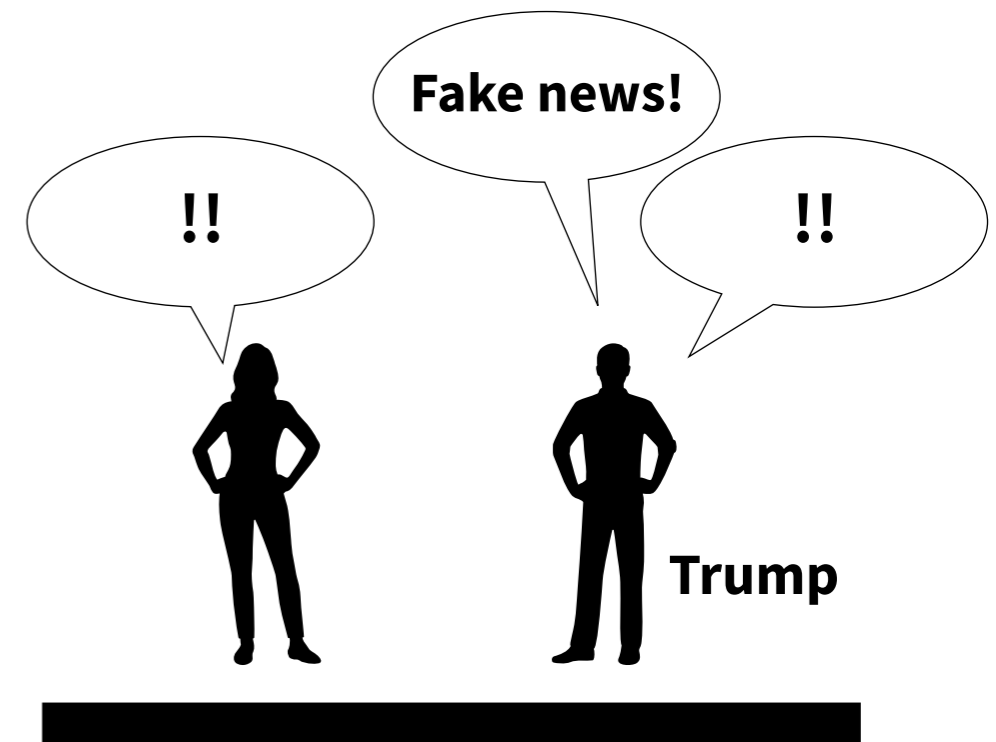
## Part IV オブジェクトと建築

オブジェクト指向存在論が建築の分野にあたえている影響について紹介。

# Part I 知を挫折させる岩としての実在

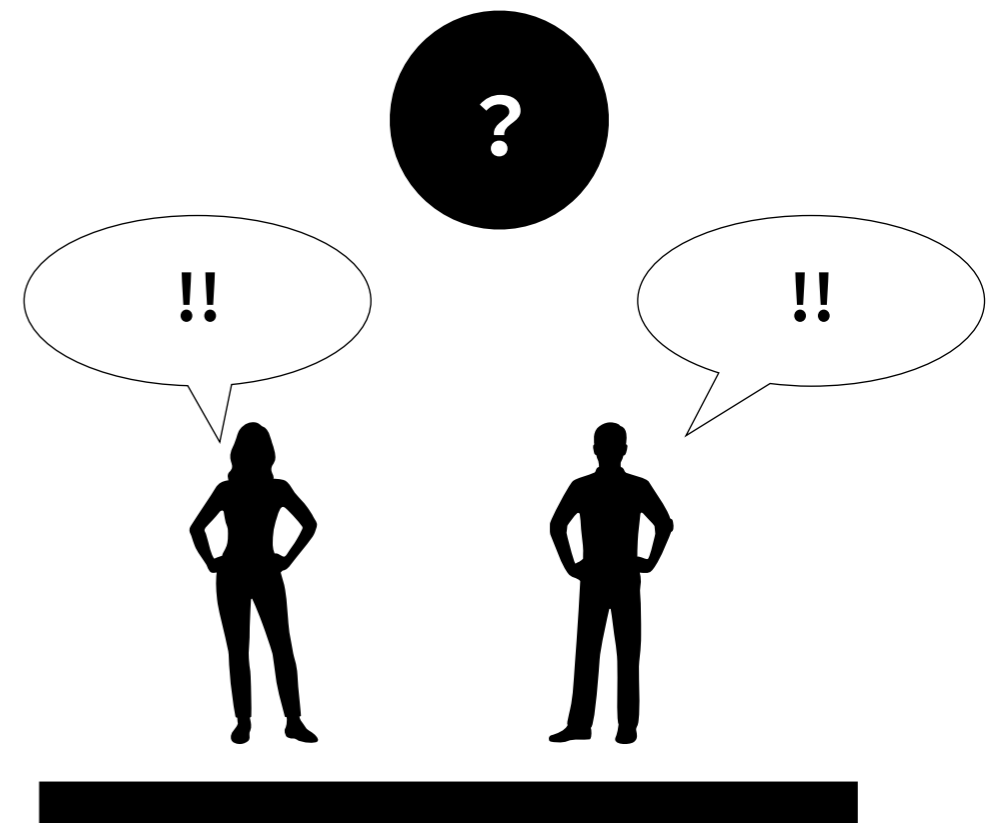
# ポスト・トゥルース的状况

- トランプが当選した2016年（以降）は、ポスト・トゥルース的な状况にあると言われる。
- ポスト・トゥルースとは「世論形成において、客観的事実よりも、感情や個人的信念に訴えることのほうが影響力をもつ状况」（OED）。
- たとえば、トランプは客観的事実に反することを主張する。
- トランプに対しては、客観的事実を突きつければ良いように思われる。
- しかし、だれが特権的な「客観的事実」なるものを手にしていると言えるのか？
- あらゆる主張は、同一平面上にある。  
現代は、徹底的に相対主義的な状况。



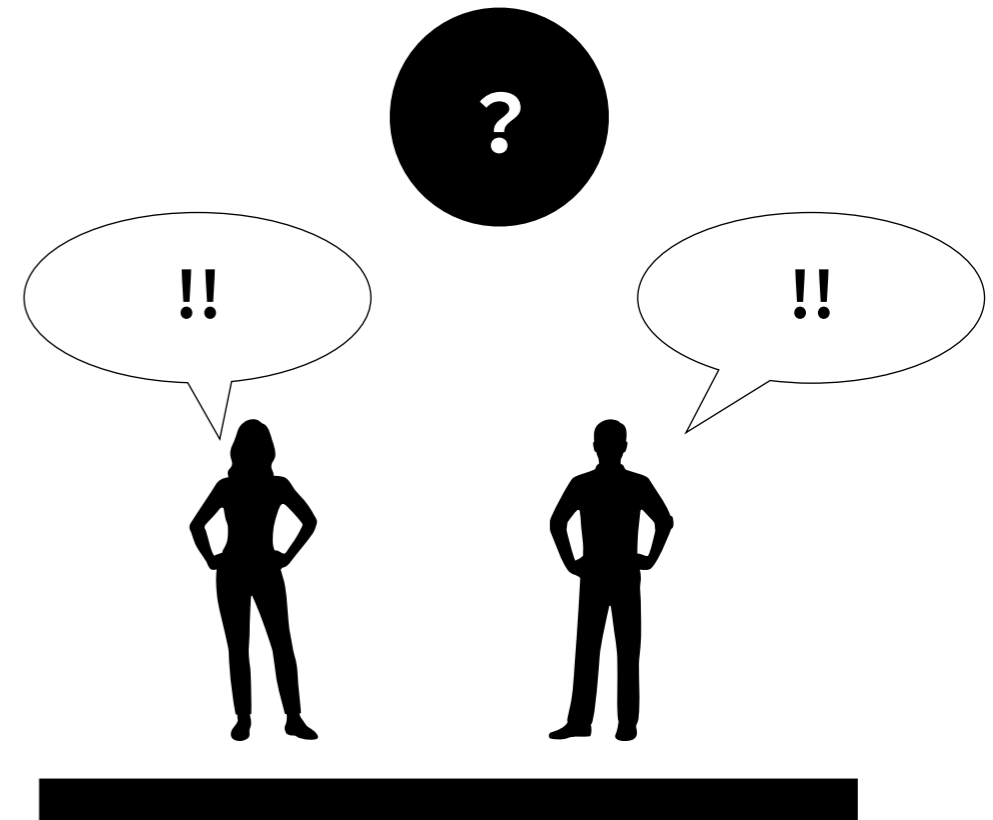
# 知を挫折させる実在

- ポスト・トゥルース的状况は、だれも絶対的な「客観的真理」を提示できない相対主義的状况を悪用することによって生じている。
- けっきょく、各人がそれぞれ断定的な主張をしているだけ。
- 諸々の解釈が、同一平面上におなじ権利をもって並び立っている。
- ハーマンにしたがえば、この相対主義的状况は観念論的である。
- つまり、諸解釈の背後に、実在そのものがある。



# 知を挫折させる実在(2)

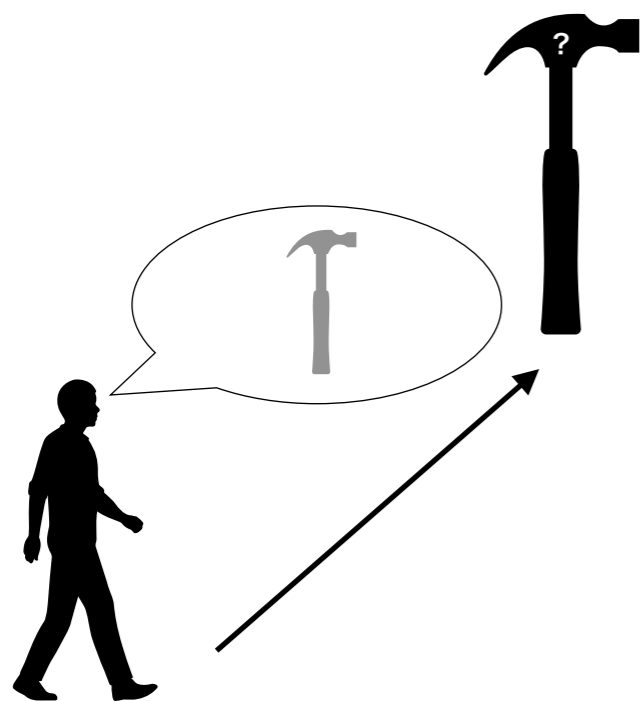
- 「実在とは、わたしたちが乗り込むさまざまな船がつねにそれへとぶつかり挫傷してしまう岩礁である…」  
(Graham Harman, *Object-Oriented Ontology*, London: Pelican, 2018, p. 6)
- つまり、実在そのものにかんして、だれも直接的な知を得ることはできない。
- あらゆる解釈は、実在にかんする不完全なイメージにすぎない。
- したがって、諸解釈はひとしくまちがっていることになる。
- 実在と解釈のあいだの断絶に気づくことによって、言いたい放題であった状況から、おそらく各人がすこし謙虚になる。





# ハーマンにしたがえば…

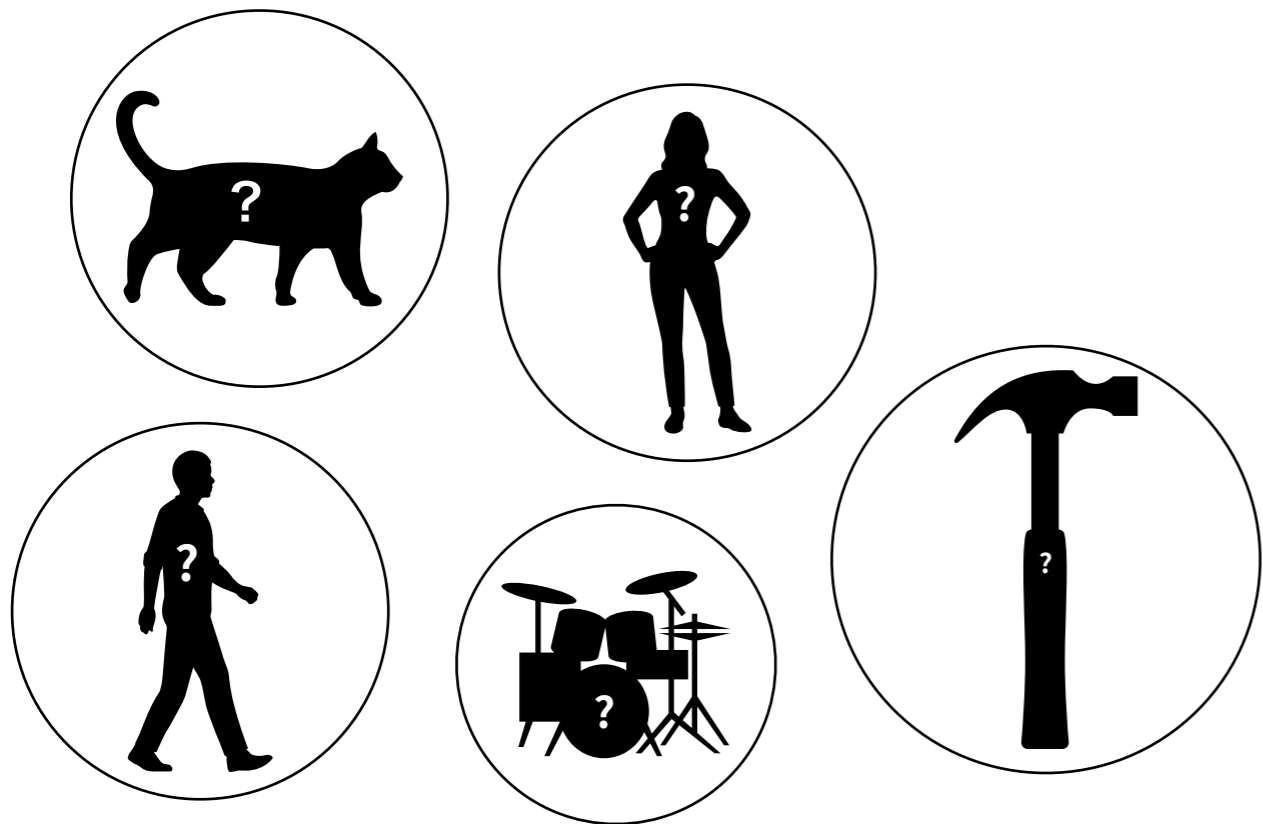
- わたしたちがなにかある対象（実在）にむかったときに手にしているものは、いわばその「イメージ」にすぎない。
- 対象そのものは、わたしたちがもつイメージ以上の性質を隠し持つ。
- 対象そのものは、イメージの背後に退いている。
- わたしたちは、けっして対象そのものに触れることはできない。



- このことをハーマンは、「対象は、直接的なアクセスから退隠する」と表現する。
- つまり、対象は隠れている。

# あらゆる対象が退隠しあう

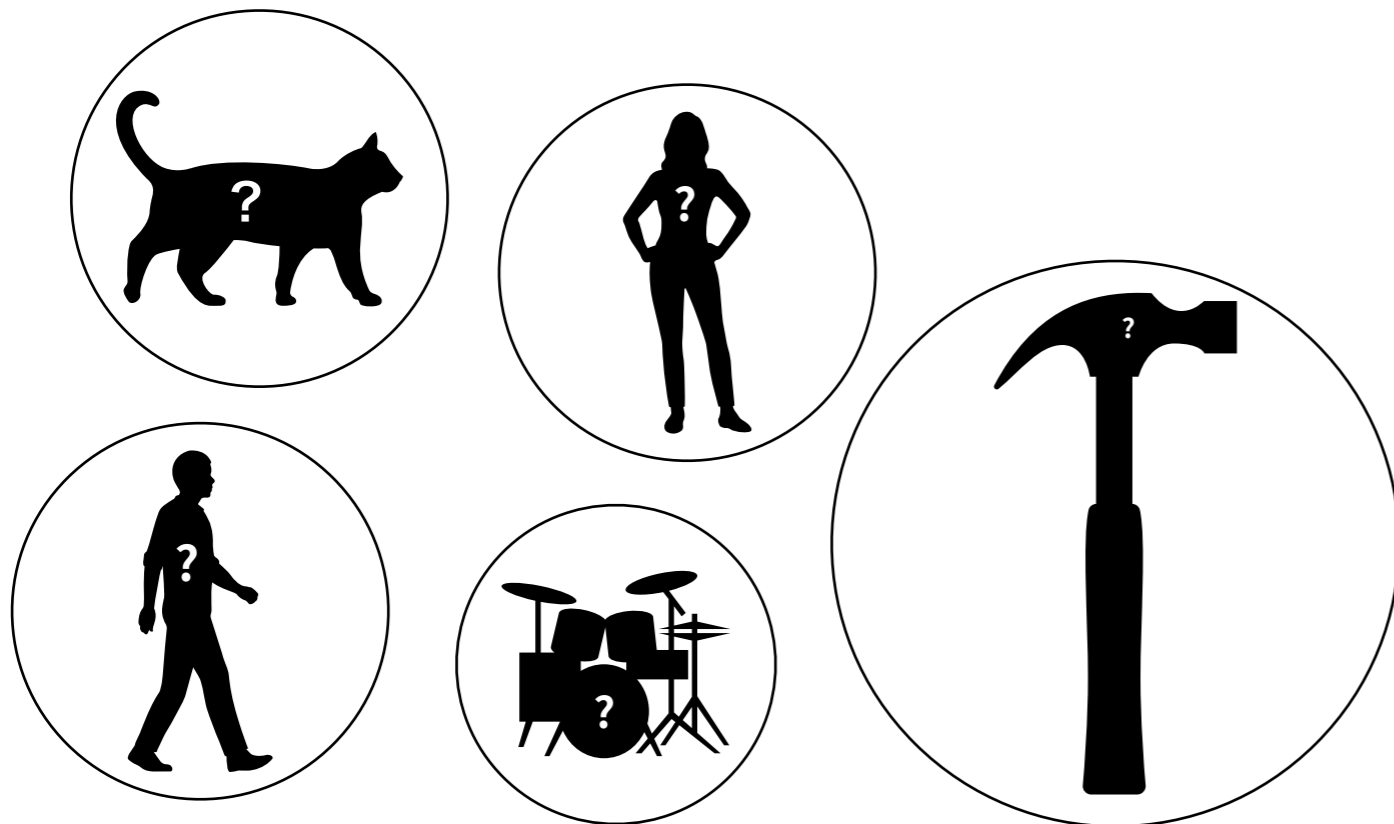
- 対象は、人間のまなざしから退隠するだけではない。
- わたしも、恋人も、猫も、ハンマーも、ロックバンドも、自立的な統一性をもっているかぎりにおいて、ハーマンが言う意味での対象である。
- こうしたあらゆるタイプの対象が、他のあらゆる対象によるアクセスから退隠している。



- 対象は、いわば「真空パック」によって包まれ、たがいのアクセスから隔絶されている。

# 隠れた余剰が噴出するとき…

- あらゆる対象があらゆる対象にとって、なんだかわからないもの、汲み尽くすことのできないミステリアスな存在となっている。
- 対象は、げんに顕になっている性質以上のもの、余剰を隠し持つ。
- そうした余剰が吹き出すとき（ハンマーが壊れるとき、など）、劇的な変化をもたらされる。



## Part II グレアム・ハーマンとは

# グレアム・ハーマン

生年：1968年

出身：アメリカ合衆国

所属：カイロ・アメリカン大学教授（2016年まで）

南カリフォルニア建築大学特別教授（2016年以降）

立場：オブジェクト指向哲学（思弁的实在論、オブジェクト指向存在論を牽引）

影響：ハイデガー、ホワイトヘッドなど（修士課程の指導教官はリングス）

ブログ：<http://doctozamalek2.wordpress.com>



## GRAHAM HARMAN

# ハーマンのおもな著作

すでに15冊以上の著作、100本以上の論文・記事がある。

- ***Tool-Being: Heidegger and the Metaphysics of Objects***, Chicago: Open Court, 2002.

→ハイデガーの道具分析を独自に解釈することによって、オブジェクト指向哲学の構築へと向かう、ハーマンのデビュー作。

- ***Guerilla Metaphysics: Phenomenology and the Carpentry of Things***, Chicago: Open Court, 2005.

邦訳、準備中。

→『道具存在』の続編。非関係的な事物を関係させる理論として、代替因果を提示。

# ハーマンのおもな著作(2)

- “**On Vicarious Causation,**” in *Collapse II* (2007), pp. 171-205.  
「代替因果について」岡本源太訳、『現代思想』2014年1月号所収。  
→『ゲリラ形而上学』のコンパクトなまとめ。
- ***The Quadruple Object***, Winchester: Zero Books, 2011.  
『四方対象』岡嶋隆佑監訳、人文書院、2017年。  
→メイヤスーの勧めでフランスにて出版したものの英語版。ハーマン自身の哲学体系が提示されている。
- “**The Road to Objects,**” in *continent* 1.3 (2011), pp. 171-179.  
「オブジェクトへの道」飯盛元章訳、『現代思想』2018年1月号所収。  
→『四方対象』で示された体系のコンパクトなまとめ。

# ハーマンのおもな著作(3)

- ***Object-Oriented Ontology: A New Theory of Everything***, London: Pelican, 2018.

→オブジェクト指向存在論の入門書。美学理論、社会理論にかんする考察も含む。中大で読書会を開催（火曜16時40分から）。

- ***Art and Objects***, Cambridge, UK: Polity, 2018.

- ***Speculative Realism: An Introduction***, Cambridge, UK: Polity, forthcoming September 2018.

森元斎訳、人文書院、2019年出版予定。



# ハーマンのおもな著作(4)

その他、邦訳のあるもの

- “**On the Horror of Phenomenology: Lovecraft and Husserl,**” in *Collapse Vol. IV* (2008), pp. 333-364.

「現象学のホラーについてーラヴクラフトとフッサール」 飯盛元章・小嶋恭道訳、『ユリイカ』2018年2月号所収。

- ***Bells and Whistles: More Speculative Realism***, Winchester: Zero Books, 2013.

抄訳「オブジェクト指向哲学の76テーゼ」 飯盛元章訳、

[https://www2.chuo-u.ac.jp/philosophy/image/76\\_Theses\\_on\\_OOP.pdf](https://www2.chuo-u.ac.jp/philosophy/image/76_Theses_on_OOP.pdf)。

→ドクメンタ芸術祭のカタログ用に準備されたが未完におわった論文。オブジェクト指向哲学の体系をコンパクトに提示。

# ハーマンのおもな著作(5)

- “**The Future of Continental Realism: Heidegger’s Fourfold,**” in *Chiasma: A Site For Thought* vol. 3, issue 1 (2016), pp. 81-98.

「大陸実在論の未来－ハイデガーの四方界」高野浩之・飯盛元章訳、  
『現代思想』2018年2月臨時増刊号所収。

→ハーマン独自のハイデガー解釈がまとめて提示されている。

# 現代哲学における潮流

## 思弁的実在論

カンタン・メイヤサー

レイ・ブラシエ

イアン・ハミルトン・  
グラント

グレアム・ハーマン

## 新しい実在論

マウリツィオ・フェラーリス

マルクス・ガブリエル

マヌエル・デランダ

ステイーヴン・シャヴィロ

ジェーン・ベネット

ユージン・サッカー

トリスタン・ガルシア

レヴィ・ブライアント

イアン・ボゴスト

ティモシー・モートン

## オブジェクト指向存在論

# 思弁的実在論

- 2007年4月27日、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジにて開催されたワークショップ「思弁的実在論」に端を発する潮流。
- ワークショップの発表者は、レイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラント、ハーマン、カンタン・メイヤスーの4人。
- 「相関主義」(correlationism)を退けるという点においてのみ一致した緩やかな立場。略称はSR (Speculative Realism)。



# 相関主義とは

- メイヤスーが『有限性の後で』のなかで命名。カント以降の近代哲学において前提されている立場。
- 思考と存在の相関にのみアクセスできるという立場。
- 相関主義にしたがえば、わたしたちは思考されたかぎりでの存在についてしか思考することはできない。
- つまり、わたしたちがそれについて思考しようがしまいが関係なく、それ自体で存在している世界そのものについて思考することはできない。
- 人間誕生以前あるいは絶滅以後の世界について語ることはできない。
- 思弁的実在論はこうした立場を乗り越え、存在そのものについて語る。

# オブジェクト指向存在論

- ハーマンは自らの立場を元々「オブジェクト指向哲学」と呼んでいた。
- レヴィ・ブライアントが2009年に、ハーマン以外のオブジェクト指向的なアプローチを包括することができる用語として「オブジェクト指向存在論」という表現をもちいた。略称は、OOO (Object-Oriented Ontology)。
- 2010年4月23日ジョージア工科大学にて、シンポジウム「オブジェクト指向存在論」が開催される (<http://ooo.gatech.edu>) 。
- ハーマン、ブライアント、ティモシー・モートン、イアン・ボゴスト。



B. ORIENTED ONTOLOGY

# オブジェクト指向存在論(2)

「オブジェクト指向哲学は、思弁的实在論の亜種であるともみなすことができる…。思弁的实在論の論者であるためにあなたがすべきことは、なんであれお好みの理由で、ただ相関主義を拒否することだけである。オブジェクト指向哲学の論者であるために必要なことは、さまざまなスケールの個体的存在者を宇宙の究極的要素とみなすことである」 (Graham Harman, *Bells and Whistles*, op. cit., p.6)。

**SR** アンチ相関主義

**000** アンチ相関主義 + 個体重視

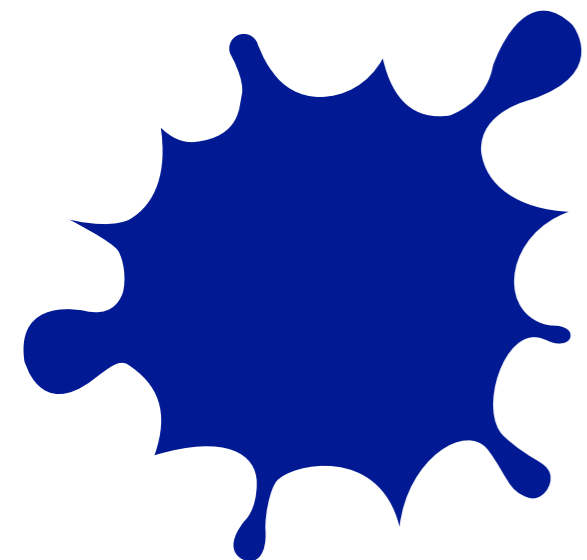
# オブジェクト指向プログラミング

- 「オブジェクト指向存在論」（ないし哲学）と「オブジェクト指向プログラミング」とは、直接的な関係はない。
- ハーマンが、「オブジェクト指向」という用語を借用しただけ。
- とはいえ、両者には類似点もある。
- OOP以前のプログラミング：プログラムの諸部分が全体と融合。新しいプログラムを組むときに、一から全部組みなおす必要がある。
- OOP：それぞれ独立したオブジェクトを単位とする。オブジェクトは「カプセル化」され、他のオブジェクトから隠れている。  
(cf. Graham Harman, *Object-Oriented Ontology*, op. cit., p. 11)



# アート分野への影響

- ドイツ・カッセルのフリデリシアヌム美術館において、2013年9月29日から2014年2月23日までのあいだ、思弁的实在論をテーマにした企画展「名もなき物質たちをめぐる思弁」が開催された。  
→シンポジウムには、グラントやマルクス・ガブリエルが登壇。
- ハーマンは、ロンドンに拠点を置く現代アートの雑誌『アートレビュー』が発表している「アート業界で影響力のある人物トップ100」のなかに、2013年から2015年にかけてランクインしている  
([http://artreview.com/power\\_100/graham\\_harman/](http://artreview.com/power_100/graham_harman/))。



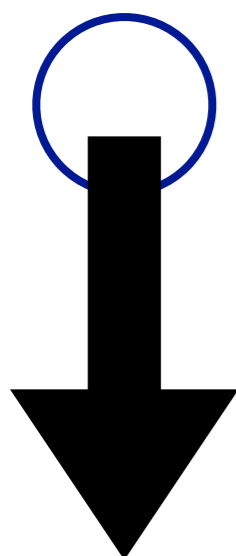
## Part III オブジェクト指向存在論について

# 反オブジェクト指向の哲学

- 懐疑的な態度ではなく、常識にもとづいた素朴な態度から出発すれば、対象が主役となる。  
オブジェクト
- ペン、メガネ、パスポート、エジプト、カイロ、ディオクレティアヌス、ユニコーン、などなど。
- しかし、おおくの哲学は、素朴に出会われる対象を、べつのものへと還元しようとする。
- そうした反オブジェクト指向的な企てには、おおきく分けてふたつのタイプがある。

# 下方解体

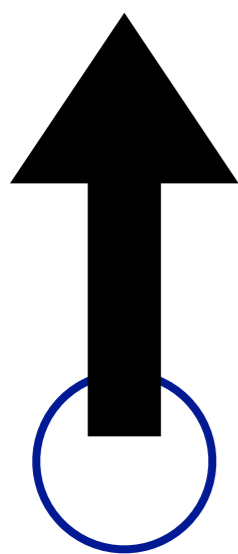
- 「対象はあまりに浅すぎるので、究極的実在の名に値しない」と主張。
- 個体的対象を生じさせる、より深い実在を設定する。
- 対象を下方向（原因）に還元。
- 例：アルケー（タレスなど）、前個体的なもの（シモンドン）、根源的な流動（ベルクソン、ドゥルーズ）。



UNDERMINING

# 上方解体

- 「対象はあまりに深すぎる。対象は不要な仮設だ」と主張。
- 対象から派生する表層的なものだけで説明する。
- 対象を上方向（結果）に還元。
- 例：観念論（バークリ）、印象の束（ヒューム）、相関主義、関係主義（ホワイトヘッド、ラトウール）→つぎのスライドにて。



OVERMINING

# 相関主義と関係主義

「この〔相関主義の〕立場の別形態として、「関係主義」と呼ぶような、人間中心ではない立場を挙げることができるだろう。それは、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドとブルーノ・ラトウールの著作のうちに、もっともはっきりと見て取れるものだ。関係主義の哲学は、あらゆる関係に人間がふくまれないといけないということは認めない。だが他方で、事物は他の事物との関係の総体であり、それ以上のものではないと主張する」

(“**Zero-Person and the Psyche**,” in David Skrbina (ed.), *Mind That Abides: Panpsychism in the New Millennium*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2009, p. 260)

# 相関主義と関係主義(2)

## 相関主義 (correlationism)

思考する人間との相関を離れて、対象そのものが存在することはできない。

## 関係主義 (relationism)

思考する人間と対象との関係は特権的ではない。思考する人間がいなくてもよい。あらゆる対象どうしの関係が平等。

ただし、他の対象との関係を離れて、対象そのものがそれ自体で自立して存在することはできない。

→「あらゆるものが結びついている」というホーリズム的発想（文脈重視）が、学術研究にいきわたっている。関係主義は、オブジェクト指向存在論の強敵。

# 関係主義の問題点

## 関係の無限遡行におちいる

- たとえばホワイトヘッドのモデルの場合、ある存在者は時間的に先行する存在者との関係によって成り立っている。
- ある存在者がなんであるかは、先行する存在者との関係によって成り立つが、この先行する存在者もまた、それに先行する存在者との関係から成り立つ→いつまでも個体的実在性を手にできず、無限に遡る。

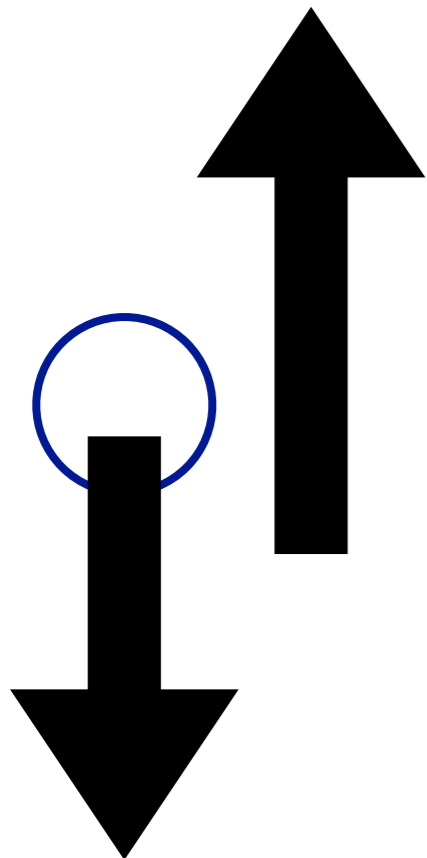
## 変化が不可能になる

- 他の存在者との関係によって完全に規定されてしまうと、そこから動けなくなってしまう（無数の絆でガチガチに縛られたイメージ）。
- 変化が生じるためには、非関係的な余剰が事物のなかになければならない。



# 二重解体

- 唯物論は、対象を下方解体すると同時に上方解体する。
- 「対象は、より根源的な物質から構成されている」 → 下方解体
- 「物質は数学的に定式化可能な属性をもつ」 → 上方解体
- 中間の対象を素通りしてしまう。



DUOMINING

# 退隠する対象

- ハーマンは、下方解体・上方解体（そして、二重解体）によって還元されることのない強固な自立性を対象に持たせる。
- 対象は、汲みつくすことのできない余剰をもっている。
- わたしは、理論的な認識によっても、実践的な操作によっても、対象の实在性を汲みつくすことはできない。
- 人間だけでなく、無生物的な対象どうしもまた、たがいを汲みつくすことに失敗。木綿とそれを燃やす炎との因果関係。
- 対象と関係することによって得られるのは、事物の戯画化されたもの（カリカチュア）だけ。
- 対象そのものには触れられない。
- 対象は、あらゆる関係から「退隠する」(withdraw; entziehen)。

# 実体概念の再評価

「アリストテレス、スコラ哲学、ライプニッツは、第一実体や実体形相という発想のもとで、初期のオブジェクト指向学派を形成したのだとみなすことができる。彼らは、世界の根源的要素の地位から個体的存在者を追放しようとする論者として目論む下方解体論者と上方解体論者の両陣営に包囲されながらも、それらに果敢に立ち向かったのである」

(“The Road to Objects,” op. cit., pp. 172-173)

- 実体の哲学は、個体的存在者を還元不可能なものとする。
- オブジェクト指向存在論の味方。

# 対象と伝統的な実体のちがい

## 自然物である必要はない

猫や星といった自然物だけでなく、海賊船やiPhoneといった人工物も対象である。

## 単純なものである必要はない

ライプニッツは、単純なものと集合体を区別した。だが、アメフトチームといった複合的なものも対象である。

## 破壊不可能なものである必要はない

ライプニッツは、実体は永遠的であると考えた。だが、昆虫や惑星といった滅びうるものも対象である。

# 代替因果

「オブジェクト指向哲学にとってもっとも中心的な論点は、代替因果である。これは、ながいあいだ評判を落としてきた機会原因の考えの修正版として導入された概念である。もし対象が他の対象との知覚的あるいは因果的関係を超え出ているならば…、それらがいかにして相互作用するのかという問いがただちに生じることになる。より簡潔に言えば、わたしたちが抱える問題とは、非関係的对象がなんとかして関係するというものである。オブジェクト間の因果関係は直接的ではありえないので、それはあきらかに代替的でしかありえない。つまり、それはまだ詳述されていないなんらかの媒介によって生じるしかありえないのである」

(*Guerilla Metaphysics*, op. cit., p.91)



# 代替因果(2)

- 対象は、あらゆる関係から退隠する。
- 対象どうしを関係させることが困難になる。
- しかし、日常的な経験にしたがえば、対象は相互に作用しあっている。
- 対象の退隠は「半真理」にすぎない。
- 非関係的な対象をなんとか関係させなければならない。
- 実体を関係させる伝統的な理論→機会原因論。
- 機会原因論は、神という特権的な存在者を媒介させることによって実体どうしの関係を説明。
- 神ではない媒介（代替物）によって対象どうしを関係させる。
- →代替因果。「触れることなく触れる」。

# 代替因果(3)

- 代替因果の理論は、『ゲリラ形而上学』（2005）においてはじめて提示された。
- その後、論文「代替因果について」（2007）においてコンパクトにまとめられた。
- しかし、そのしくみはあまり明確には述べられていない。
- また、その後の著作である『四方対象』（2011）において提示された体系と整合しているのかも疑問。
- 以下、『ゲリラ形而上学』、「代替因果について」における記述を整理してみる…

# 実在的対象と感覚的対象

## 実在的対象 (real object)

あらゆる関係から退隠する対象そのもの。

観察者がいなくてもそれ自体で存在する自立的な対象。

事物。

## 感覚的対象 (sensual object)

事物のカリカチュアとしての対象。

知覚者が向きあっているかぎりにおいてのみ存在する対象。

フッサールの「志向的対象」。

イメージ。



# 実在的対象と感覚的対象(2)

## 感覚的対象が媒介の役目を果たす

「ふたつの感覚的対象が実在的対象によって代替的にむすびつくように、ふたつの実在的対象は感覚的対象によってむすびつかなければならない。わたしが他の対象と接触するのは、その内的生との不可能な接触をつうじてではなく、たんに表面をかすめて、内的生を動かすことによってである。…実在的対象どうしの接続は、感覚的媒介によってしか生じない」

(“On Vicarious Causation,” op. cit., pp. 203-204)

# 実在的対象と感覚的対象(3)

- 感覚的対象は、わたしの精神のうちにあるのではない。
- なぜなら、わたしと感覚的対象は分離された別個のものだから。

たとえば、つぎのような場合…

- 知覚するわたし：実在的対象 (RO)
- 知覚されている木：感覚的対象 (SO)
- わたし (RO) と木 (RO) がなんとかして (somehow) つながりを形成するとき、この関係自体がひとつの実在的対象となる。
- わたし (RO) と木 (SO) は、〈わたし (RO) と木 (RO) の関係〉という実在的対象のうちで遭遇する。
- 「全体としての志向〔的関係〕が、実在的なわたしと感覚的な木のいずれをも包含している」 (“On Vicarious Causation,” op. cit., p. 183) 。



# 魅惑

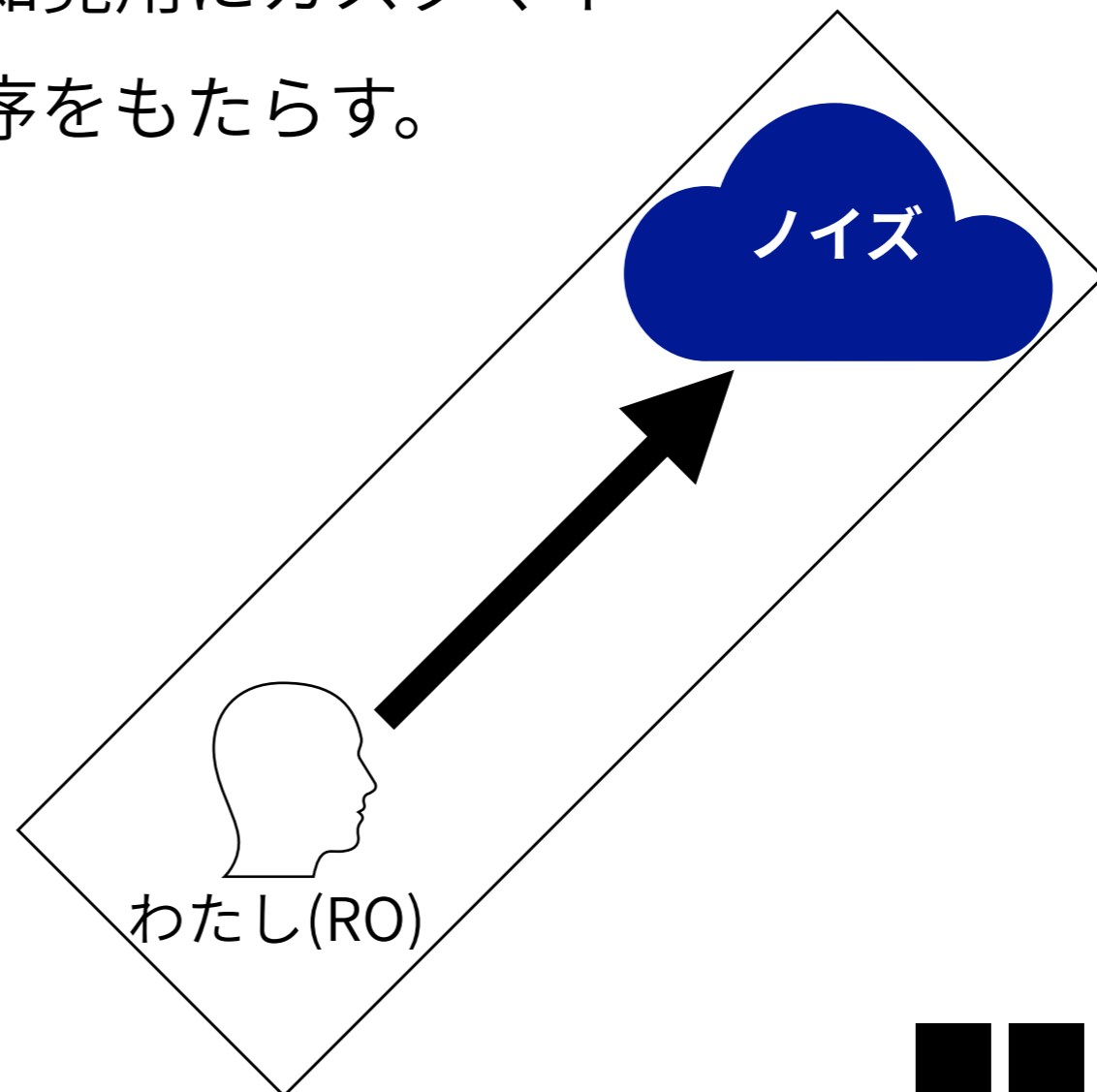
「代替因果はつねに魅惑の一形式である」  
(Guerilla Metaphysics, op. cit., p.230)

# 魅惑(2)

## 通常の知覚

ブラックノイズに覆われている。

ブラックノイズ：ありふれた知覚風景を彩る  
偶発的な性質。わたしの知覚用にカスタマイズ  
されている。知覚に秩序をもたらす。



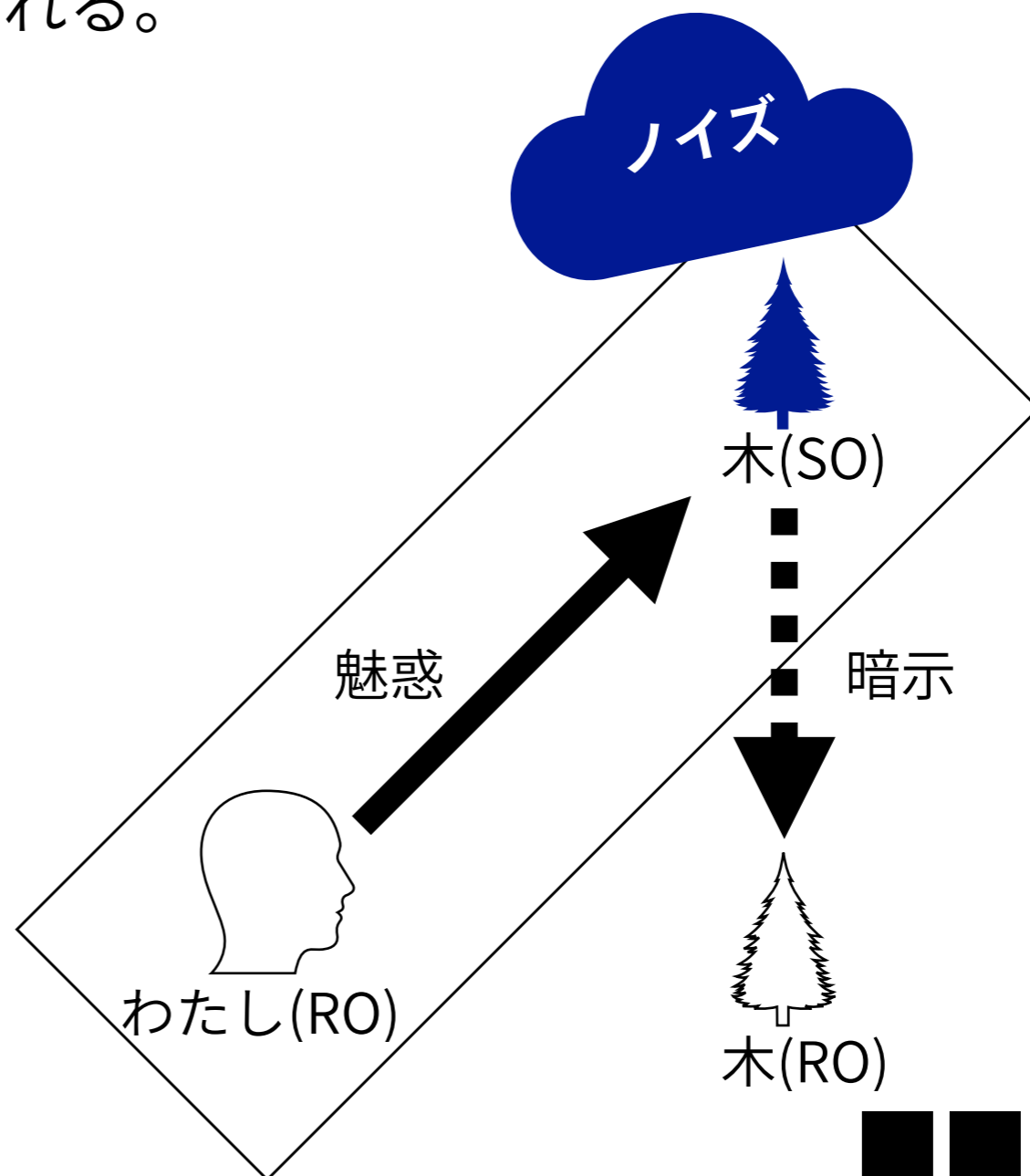
# 魅惑(3)

## 魅惑的知覚

- ① 情緒的な衝撃によってブラックノイズが吹き飛ぶ。
- ② むきだしのSOに魅惑される。
- ③ SOがROを暗示。

「存在者は、世界内の他の存在者とのどんな関係からも、あるいはどんな影響からもかけ離れている。魅惑 (allure) が暗示する (allude) のは、そうしたあるがままの存在者である」

(“The Well-Wrought Broken Hammer: Object-Oriented Literary Criticism,” in *New Literary History* 43 (2) (2012), p. 187)



# 魅惑(4)

## 魅惑の具体例

「友人は、日々のできごとや会話のなかで、たえずぼんやりと現前するようなものとして、わたしたちの日常生活のうちに住みついている。しかし、裏切りをとおしてであれ、楽しげな驚きをとおしてであれ、友人はそれによってわたしたちを魅惑するのだ。そしてその友人は、以前はブラックノイズの圧力によって、なめらかに統一された全体へと圧縮されていたみずからの特徴から切り離されることになる」

(*Guerilla Metaphysics*, op. cit., p.223)

# 魅惑(5)

## 魅惑の具体例

「才能あるヴァイオリニストが、コンサートの際に足をすべらせて転落したり、パニックを起こしたりして最後まで演奏することができなかった場合、彼女は、これまで暗黙のうちに彼女自身と同一視することを要求してきたヴァイオリニストとしての特徴と、もはやそれほど密接にはむすびつかない何者かとして曝け出されることになる」

(*Guerilla Metaphysics*, op. cit., p.212)

# 魅惑(6)

- 魅惑は、触れえないもの、関係しえないものの自律的な実在性を暗示する。関係しえないものとの関係。現前しているものがすべてではない、と感じさせる経験。
- なじみの世界が怪奇的なものに変貌。意味づけのはたらきが失効して、〈なんだかわからないもの〉が経験の領域に噴出する。
- 関係から断絶した実在が、なぜあるといえるのかの認識論的な根拠となっている。
- 魅惑をとおしての暗示は、あくまでも暗示。実在についての正しい認識が可能になるのではない。SOはカリカチュア。
- 「魅惑は無生物の領域においてでさえも生じなければならない」  
(Guerilla Metaphysics, op. cit., p.245)。

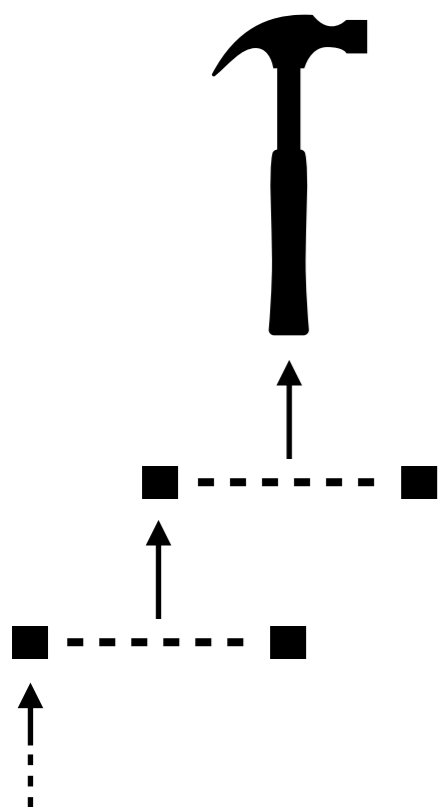


# フラットな存在論

- マヌエル・デランダが、「フラットな存在論」 (flat ontology) という用語を積極的な意味でもちいた。
- ハーマンも、フラットな存在論の立場に同意。
- すべての存在者が、存在論的にひとしい身分をもつ。
- 人間も、木も、カリウム原子も、軍隊も、都市も、存在論的に等しい身分をもつ。あらゆるものが対象であるという点で平等。
- したがって、人間だけが、感覚的对象に遭遇することができる特権的な存在であるのではない。
- あらゆる存在者が感覚的对象に遭遇しうる。たとえば、実在的对象としての炎は、木綿の感覚的对象に遭遇する。
- 事物どうしのあいだでも魅惑が生じる。

# さまざまな水準の対象

- ハンマーは、諸部分の関係から成り立っている。
- とはいえ実在的对象であるハンマーは、諸部分の関係に還元されない自律性をもつ。還元されるとすれば、下方解体になってしまう。
- 全体としてのハンマーは、諸部分の関係から創発する。部分のある程度入れ替えても、全体としてのハンマーはべつのものにならない。
- つまり、ハンマーも、その諸部分も、すべてが自律した実在的对象。

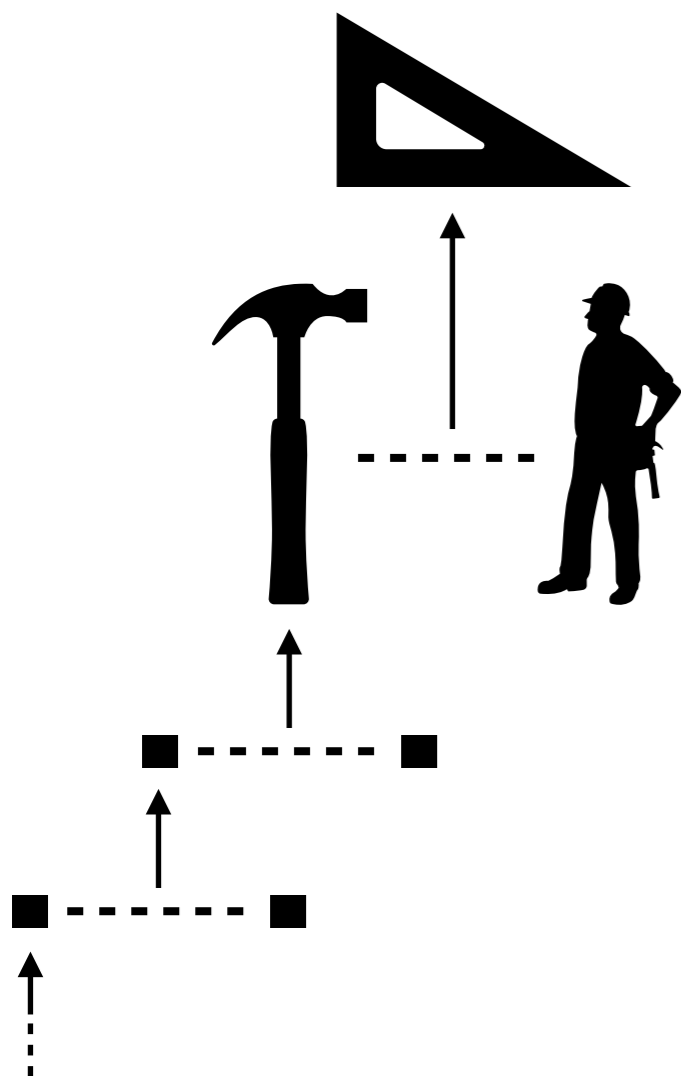


- ハンマーの諸部分もまた、諸部分の関係から成り立つ（創発する）。
- どこまでいっても、部分としての実在的对象がある。下方に無限に遡ることができる。
- どこかで止まるとすれば、特権的な究極的構成要素が存在することになってしまう。



# さまざまな水準の対象(2)

- ハンマーがあらたな関係のうちに組み込まれ、上方にあらたな対象を生み出すこともある。
- たとえばハンマーとわたしが（代替的に）関係することで、大工仕事というあらたな実在的対象が創発する。



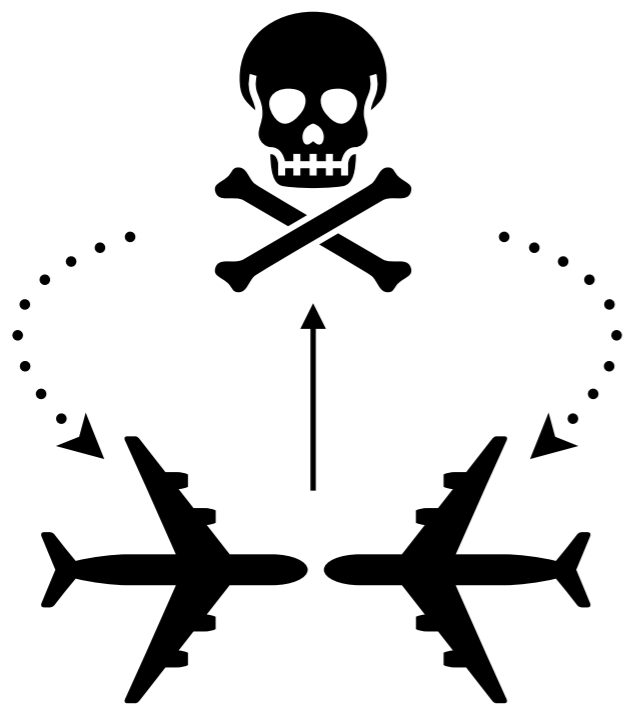
- しかし、ハンマーがだれにも使われず、倉庫で眠ったままであるということもある。
- 「眠れる対象」 (sleeping object) 。
- 下方においては諸部分の関係から成り立っているが、それ自身は他の対象と関係せず、あらたな対象の部分とはなっていない対象。
- 眠れる対象は、もっとも純粹な対象。

# さまざまな水準の対象(3)

## 航空ショーで戦闘機が衝突する、という例

(“Time, Space, Essence, and Eidos,” in *Cosmos and History*, vol. 6, no.1 (2010), pp. 13-14)

- 実在的对象である2機の戦闘機が衝突。
- 2機の戦闘機を構成要素とする、「衝突」というあらたな実在的对象が創発。



- 「衝突」という全体としての対象から、その諸部分に対して遡及的な作用がもたらされる。
- 戦闘機どうしは、直接的に作用しあわない。

## Part IV オブジェクトと建築

# 000の建築の分野への影響

## 建築の雑誌でとりあげられる

- ***tarp: Architecture Manual***, Spring 2012.  
ハーマン、モートン、エリック・ゲノイウ、デイビッド・ルイ、パトリック・シューマツハラが寄稿。
- ***Log***, No. 33, Winter 2015.  
マーク・フォスター・ゲージらが寄稿。

## ハーマンがSCI-Arcに招聘される

- ハーマンが、2016年に南カリフォルニア建築大学に招聘される。
- ハーマン自身も、最近、美学や建築にかんする考察が目立っている。

# 000の建築の分野への影響(2)

## 関係主義 vs. オブジェクト指向

- 関係主義 vs. 000という対立が、哲学から建築の領域へとうつつて、ふたたび繰り広げられている。
  - 1990年代以降、建築にドゥルーズの影響。
  - 存在よりも生成、非連続性（角や隙間）よりも連続性（カーブ）、非関係性よりも関係性が好まれる。
  - 建築におけるそうした状況に不満をもつ理論家たちが、000を支持している。
- …と、さしあたり整理できる。

# デイビッド・ルイ

David Ruy 所属：SCI-Arc

## "Returning to (Strange) Objects"

- 「（奇妙で不可解な）オブジェクトへの回帰」平野利樹訳、  
<http://10plus1.jp/monthly/2016/12/issue-03.php>
- 「1990年代半ばから、建築の言説は、建築のオブジェクトから建築のフィールドへと、その主題を急速に移行させていった。そのなかで建築のオブジェクトが持っていた神秘的な魔力も失われた。そして最近の建築作品は、オブジェクトそのものよりも本質的であり、ダイナミックで、よりリアルであるとされる、関係性のネットワークという心象イメージに囚われている」。



# デイビッド・ルイ(2)

- フィールド（コンテクスト、ネットワーク）へと関心が移ることによって、建築のオブジェクトの力が薄れてしまった。
- この傾向は、世界の諸問題に建築をとおして関わりたいという欲求にもとづく。
- こうした傾向に対する緩和剤として、OOOを援用。
- 独自の指摘：建築物だけでなく、建築家や職人もまたオブジェクト。
- そのひとがもつ能力の集合へと還元できない。AIで代用できない。
- 自律したオブジェクトとしての造り手が、他のさまざまなオブジェクト（素材など）と相互作用することで、建築のオブジェクトが生み出される。

# トム・ウィスコム

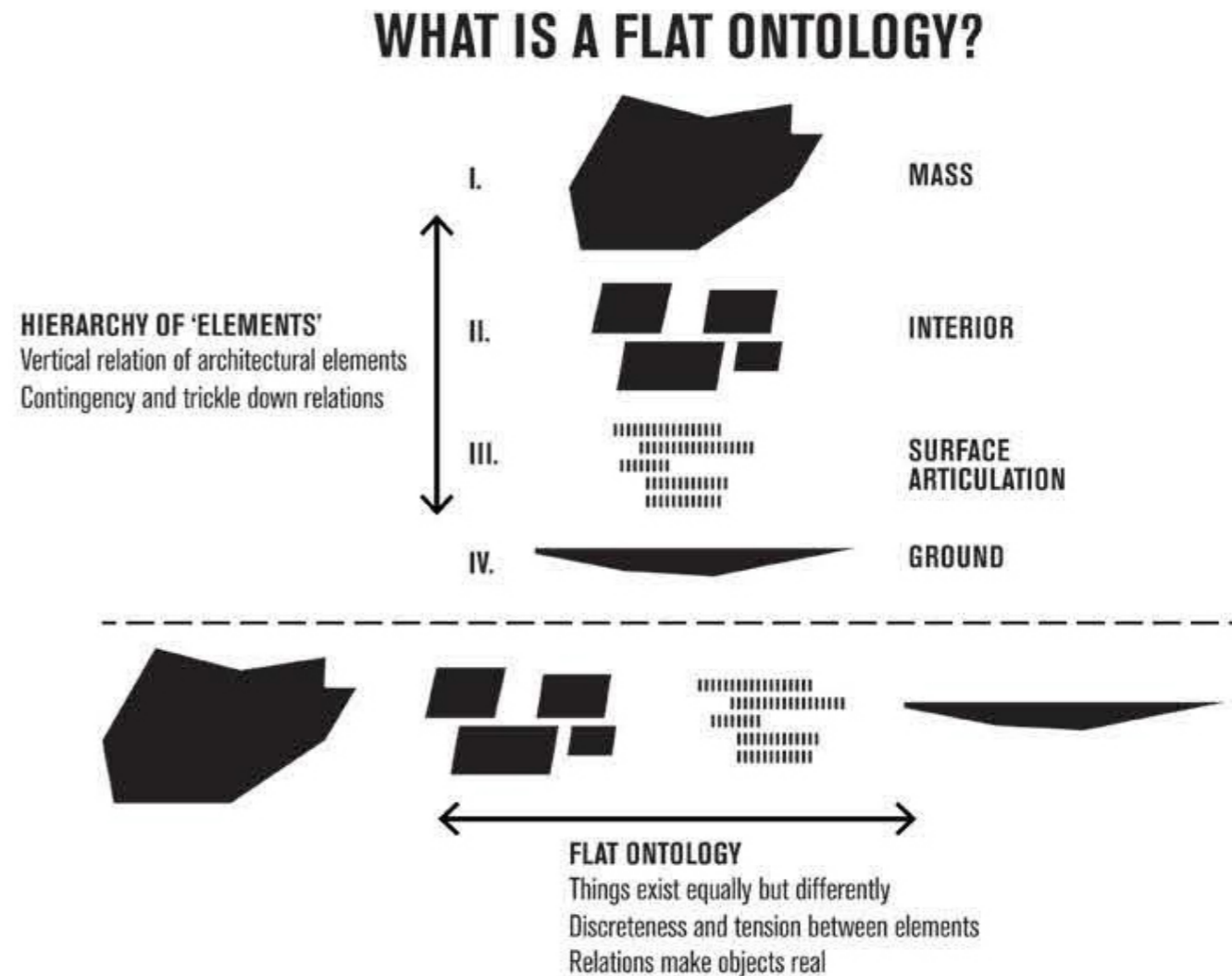
Tom Wiscombe 所属：SCI-Arc

## "Discreteness, or Towards a Flat Ontology of Architecture"

- 「フラットな存在論」に共鳴。
- フラットな存在論にしたがえば、全体と部分は、どちらも等しい身分をもつ→全体と部分の垂直的階層化を解体。
- 建築のあらゆるエレメントをヒエラルキーから解放し、平等なものとしてあつかう。

# トム・ウィスコム(2)

- 主要部、内部のオブジェクト、表面の分節、地面といった建築の諸要素をそれぞれ自律したオブジェクトにする。
- オブジェクトの自律性を保ちつつ相互作用させる。
- ミルクシェイクではなく、チヂミのようなしかた。



Tom Wiscombe, "Discreteness, or Towards a Flat Ontology of Architecture," in *PROJECT*, Issue 3, spring 2014, p. 37.

# トム・ウィスコム(3)

## 内部のオブジェクト

- 袋のなかの影 (figure in a sack)

内部のオブジェクトがゴムシートに拳を突きつけるように、外側に突き出す (Bart Hessの作品のように)。

例：Jean Nouvel's Tokyo Opera、T. Wiscombe's National Center for Contemporary Art

- ほのめかされた外殻 (implied outer shell)

内部のオブジェクトを部分的に覆う。

例：Le Corbusier's Heidi Weber Museum、T. Wiscombe's Taichung City Cultural Center

- スーパーコンポーネント

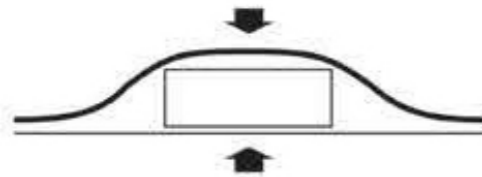
外部からオブジェクトが境界へと押しつけてくる。

例：T. Wiscombe's Maribor project for the 2012 Venice Biennale

# トム・ウィスコム(4)

## 地面

### GROUND



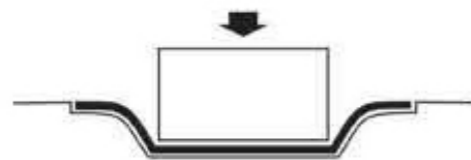
☹️ **ARCHITECTURE = LANDSCAPE**  
Fusion undermines objecthood  
Becoming  
\* *LUMP / HILL*



😊 **HOVERING**  
Empathy without fusion  
Tension, magnetism  
\* *GAP / JOINT*



😊 **GROUND OBJECT**  
Bird-in-a-nest  
Deferral of landing  
\* *GAP / JOINT*



😊 **SQUISHED IN A HOLE**  
Obscures grounding of building  
Entering at mid-level  
Not a 'foundation'  
\* *HOLE / TROUGH*

## 表面の分節

- タトウーをもちいる  
例：National Center for Contemporary Art

Tom Wiscombe, "Discreteness, or Towards a Flat Ontology of Architecture," in *PROJECT*, Issue 3, spring 2014, p. 41.



# マーク・フォスター・ゲージ

Mark Foster Gage

所属：イェール大学スクール・オブ・アーキテクチャー

## "Killing Simplicity: Object-Oriented Philosophy In Architecture"

- ハーマンの下方解体、上方解体、二重解体の概念を援用して、建築のオブジェクトを還元する立場を批判。
- パトリック・シューマツハのパラメトリシズムは、建築を下方解体するもっとも顕著な例。
- 建築物を還元する単純化に反対する。
- 建築家の仕事：知覚可能な表面のしたにうごめく、より深い実在を暗示させるような性質を設計すること。
- 見るものを魅惑するような建築物…？

# ハーマンが語る建築

## "Aestheticizing the Literal: Art and Architecture"

- 000は、非関係的な実在に関心をもつ。
- 美学における形式主義は、関係を否定。フリードは、作品と鑑賞者との関係（「演劇性」）を否定する。
- ハーマンは、美術（とりわけ建築）にとって関係も必要であると考え。建築から、人間との関係を切り離すことはできない。
- とはいえ、シューマツハのように、建築によって鑑賞者たちをかんぜんにコミュニケーションさせるという意味での関係には反対する。
- たとえばサッカースタジアムは、その内部の人たちを「一者」にしてしまう。

# ハーマンが語る建築(2)

- そうではなくて、建築（ないし作品）とそれぞれの鑑賞者との関係自体を自律的なオブジェクトにする。
- 建築内部の人たちは、それぞれ固有の別個なしかたで建築と関係している。
- 内部の人たちをまったくコミュニケーションさせない建築。
- 「ある人たちは、建築とは社会的コミュニケーションを形成するための手段であると主張してきた（パトリック・シューマツハは、はっきりとこのように述べている）。しかし、建築とはなによりもまず、非コミュニケーションという価値の表明である」。



# 建築をめぐるオブジェクト

建築家・職人も自律した  
オブジェクト (ルイ)



建築のさまざまなエレメン  
トをすべて自律したオブ  
ジェクトにする (ウイスコム)



知覚される性質が実在  
としての建築物を暗示  
(ゲージ)



建築とそれぞれの鑑賞者  
との関係を自律したオブ  
ジェクトにし、鑑賞者ど  
うしを分断する (ハーマン)

